

何故、「廣松ノート」を取ろう、書こうとしているのか？

すでに、読書メモの中で、「廣松ノート」というシリーズを始めていて、「廣松ノート(1)」として『唯物史観の原像』をとりあげています。その冒頭でこの文のテーマ「何故、「廣松ノート」書こうとしているのか？」を書き置くことでしたが、いろんなところで、そのことは書いてきているので重複するとパスしていました。しかし、断片的に書いていたことだったり、そもそもわたしの断片的に書いている文にさえ当たっていないひともいることも考え、やはり一度まとめてみます。

わたしの廣松理論との出会い

わたしが「廣松渉」という名を最初に知ったのは、新左翼運動に大きな影響を与えている思想家の二人の中のひとりとしてでした。もうひとり、吉本隆明さんです。吉本さんの方はいろいろ参加していた学習会でとりあげられていて少しは読んでいたのですが、後には、わたしの反差別論からすると、とても共鳴できなくなっていきました。廣松さんは、実際に二度の講演会でであっていました。といっても、一度は主催者側で雑務に当たっていて、ちらっと姿を垣間見た程度で、もう一度は労働組合の方の講演会でした。ですが、その時は、知識欲をくすぐられただけで、わたしの理論的な指向性と交差はしていませんでした。廣松さんの本もまだ一冊も読んでないままでした。

廣松さんの本との出会いは、大学時代の友人と久しぶりに再開して、学習会をしようかという話になり、それで本を彼に選んでもらったら、関心がエコロジーにいて、雑誌に連載していた「生態史観と唯物史観」を指定し、そのコピーをもらい、お互いが交互にレジメを出していくという方法で学習会を始めましたが、わたしが一回レジメ出してで、相手のレジメ待ちの間に「生態史観と唯物史観」を読み切り、『唯物史観の原像』を読み、『資本論』を読み始めました。結局相手からレジメは出ず、学習会は終わりましたが、それからマルクス／エンゲルスの読み落としていた本の学習と廣松学習が始まりました。

差異があるから差別があるという論理への批判のための廣松物象化論＝廣松差異論

当時わたしは、継続的総括作業の中身として反差別論をやっていて、差異があるから差別があるという論理の批判のために、差異論のとらえ返しをしていました。そういう中で、廣松物象化論に飛びついたので。廣松物象化論はもともとマルクスの『資本論』の物象化論から来ていて、マルクスの物象化論の「社会的関係を自然的関係と取り違える」ということを更に、異化というところから認識論的に深化展開した内容で、それは廣松差異論ということで、言語論と交差し廣松共同主観性論ともリンクしていきます。

そこで、この廣松物象化論から反差別論を展開していけると廣松さんの本を読み込んでいくことになります。

誤解のないように書いておきますが、廣松さんにも反差別というテーマがないことはなかったのですが、とりたててテーマとして取り上げていませんでした(註1)。

身体的差異と非身体的差異というアポリアからの脱出——関係論的なとらえ返し

さて、わたしは反差別論を「差異があるから差別がある」という論理への批判から試みよ

うとしていましたが、最初に身体的差異と非身体的差異と分類することによって、アポリア（論難）に陥っていました。そこからの脱出は、身体論の「身体とは関係性の分節である」という論攷とそのようなことを含んだ廣松身体論や廣松差異論、廣松物象化論の実体主義批判の中での、「関係の第一次性論」でした。

廣松物象化論の反差別論への援用

さて、わたしが本を出したときに、恐らく誰を読者の対象として本を出そうとするのかの自問がありました。本のタイトルからして、障害の医学モデルから「社会モデル」的なことへの転換として、パラダイム転換的な内容を孕んでいるとしていました（註2）。そもそも、先に障害関係の出版社にいろいろあたったのですが断られ、廣松さんが関係した出版社ならばと（註3）「情況出版」に話を持ちこみました。それでプレゼンのために書いた文（註1）で、それは廣松シェーレの人たちとの対話という内容を持っていたのです。投稿文のタイトルは、編集者の提起で変えましたが、もともとは「廣松物象化論の反障害論への援用 - 『反障害原論』の隠されたサブタイトル」というタイトルでした。

本を出版して、一番の批判は先に書いた、誰を対処に本を書いたのかという批判だと思っていました。ですが、理論展開をすること自体が、そもそも知の抑圧として批判がおきてくることでした。ですが、「理論なき運動は無」（註4）という提言があるように、理論なしに運動は進みえません。問題はユニバーサルな形で、展開していくことです。ほんとは、先に平易な文を書いて、後から理論的深化を図ることだったのですが、理論的展開として現実にそのようには進みません。後で、二つの文、「障害ってなーに？ 障害ということを根源的にとらえなおす」<http://www.taica.info/wdl.pdf>「ソフトクリームのようなウンコの話 一母の介護の記録と反省から介助労苦論批判のために」[sofutunnko2.pdf \(taica.info\)](http://www.taica.info/sofutunnko2.pdf)を出すに至っています。これは本に比べて平易というだけで、実際に読みやすいものにはなっていません。まだ課題を果たせないままです。しかも「ソフトクリームのようなウンコの話」の方は反省記で、それも深化をなしえぬままです。これはわたし自身が死を間近にして被介助者になったときに実践的に深化させることとしている未未完の文書にすぎません。

廣松パラダイム転換論は革命論である

実は、もう一つの課題があります。それは、わたしはいろんな被差別の問題を抱えさせられる中で、その問題を差別というところから読み解いていきました。その中で、わたしが抱える障害問題を始めとするさまざまな問題、その解決のためには、差別の問題の土台としてある、労働力の価値を巡る差別、そのことは、この社会の、すなわち資本主義社会の労働力の価値という物象化にとらわれている社会で、そしてこの資本主義社会における差別ということがこの労働力の価値ということに収束することをとらえ返していきました。そのことから障害問題の解決のためには、あらゆる差別の問題の解決のためには、資本主義社会の止揚なしにはなしえないということに至りつくのです。障害差別の根幹には、資本主義社会の根本原理、「能力は個人がもっているものだ」という能力の各私性という物象化の問題があると押さえられるのです（註5）。そのことは認識論的には、意識の各私性ということ

物象化として押さえていく必要に迫られます（註6）。

さて、廣松さんが後に書いた廣松理論の入門書を、「闘争宣言」と解説したひとがいたのですが、廣松さんの「物的世界観から事的世界観へ」というパラダイム転換論はまさに革命ということなのです。

こう断言しつつ、大急ぎで理書きを書き加えねばなりません。このままでは、意識を変えれば、理論を習得すれば革命が起きるとするような、宗派的なイデオロギー主義に陥ります。そこには、なぜマルクスが唯物史観を突き出したのかというとらえ返しが欠落しているのです。

もうひとつ、補足しなければならない問題があります。それは「差別の問題は、内部対立を生み出す、差別を言挙げしていくことは疲弊をもたらす」というような話が左翼サイドから出て来ます。わたしはこのことを原則主義と現実主義の弁証法（註7）としてとらえています。反差別の問題は原則主義の根幹にあると押さえています。わたしはむしろ左翼は、現実主義の中で原則主義をないがしろにする中で、左翼の解体が、社会変革運動の解体がすすんだのではないかと考えている次第です。

このような思いを持ちながら、廣松ノートを取り、書いていきたいと考えています。

（註）

1 これに関しては、わたしが本を出した後、『情況』への投稿、「廣松渉物象化論の反障害論-『反障害原論』の隠されたサブタイトル」[hiromatubusho.pdf \(taica.info\)](https://hiromatubusho.pdf.taica.info)を参照ください。

2 わたしはすでに関係モデル的な突き出しをしていましたので、「社会モデル」という過渡的なことを突き出したことが妥当だったかの検証が必要になります。本のタイトルからして検証の対象になっています。

3 廣松さんが第一次『情況』の編集者古賀遅さんに自分の金を渡して、これで『情況』を再刊して欲しいと提起した、という逸話があります。

4 全共闘運動の中で突き出されたスローガンに「実践なき理論は死、理論なき実践は無」ということがあります。

5 スターリンの「能力の違いがあるので、賃金が違うのは当たり前だ」というおよそ共産主義の概念からすると真逆なとらえ方は、逆にスターリン・ロシアがいかに社会主義と無縁であったかを物語っています。

6 今回の読書メモの『世界の共同主観的存在構造』は、繰り返しこの「意識の各私性」ということを批判しています。

7 弁証法を法則の物象化的にとらえることがあります。「発達保障論の弁証法」がその端的な例ですが、そうではなくて対話としての弁証法という廣松さんの押さえる「弁証法」です。もっとも、「弁証法」と言っておしまい、というようなことでなく、そこから中身の展開が必要になることは言うまでもありません。この「原則主義と現実主義の弁証法」の他、「反暴力主義と非暴力主義の弁証法」などをわたしは押さえています。まだ試論にすぎ

ません。

(み)

(「反差別原論」への断章) (55) としても)